

AI Samurai新機能発表会2026の徹底調査

調査の前提と結論

2026年7月22日に東京・日本橋で開催された「AI Samurai新機能発表会2026『特許ウォーズ®』始動 — AI エージェント時代の知財戦略へー」は、公開資料ベースで見える限り、単なる単発の新機能発表会というより、AI Samuraiが「特許検索ツール企業」から「知財AIエージェント基盤企業」へ軸足を移す転換点として位置づけられていました。公式発表で確認できる中心テーマは、**新たな知財戦略支援機能「特許ウォーズ®」の構想、生成AIと特許データベースを直結する「IP Samurai MCPサーバー」、そして大阪大学との共同研究による次世代知財機能群**です。発表会の公式プログラムでも、第1部が「特許ウォーズ® × 特許MCPで知財革新」、第4部が「MCPサーバを利用した特許検索」のデモとなっており、イベント全体がこの二軸を核に構成されていました。 ¹

そのうえで結論を先に言うと、**公開情報だけで最も実体ははっきり確認できるのは「IP Samurai MCPサーバー」**です。これは2026年7月2日に提供開始が発表され、対象業務、データ接続範囲、日本・米国・中国の特許実データ利用、IPランドスケープ作業時間短縮の事例、体験セミナーの内容まで比較的具体的に公開されています。対して、**マルチAI発明創出機能**は公開情報上でも十分に面白いが、まだ「提供予定」段階であり、**大阪大学との共同開発による「特許網（パテントポートフォリオ）自動生成」系の構想は、現時点ではR&D色が最も強く、詳細仕様は未公開**というのが実態です。 ²

なお、本稿は2026年7月22日夜時点で公開されている公式発表、会社サイト、PR TIMES、大学関連公開情報、MCPの一次資料、関連研究論文をもとにしています。少なくとも私が確認できた公開ソースでは、**7月22日当日の講演資料全文や完全な講演録はまだ出ていません**。そのため本稿は、発表会そのもののプログラムと、その前後に公開された公式リリース群を突き合わせて、どこまでが確定情報で、どこからが将来構想なのかを切り分ける形でまとめています。 ³

公式に確認できる発表内容

発表会の公式告知で明示されている内容は、かなり整理されています。東京本会場では、**第1部で「特許ウォーズ®」の構想と特許MCPを活用した知財業務革新、第2部で大阪大学・鬼塚真教授による共同研究の歩みと生成AIの最新動向、第3部でトヨタテクニカルディベロップメントとのコラボセッション、第4部でMCPサーバを用いた特許検索デモ、第5部でAI Samuraiの歴史と発明寺子屋®が扱われると告知**されていました。つまり、公開時点で少なくとも会社側が前面に出していたのは、**新機能単体よりも「知財フロー全体をAIエージェント化する」という戦略**です。 ⁴

公式資料を総合すると、今回の発表会で実質的に打ち出された新要素は、次の三つに集約できます。

- ・**特許ウォーズ®**：発明創出、先行技術調査、競合分析、知財戦略立案までを支援する次世代知財プラットフォーム構想。
- ・**マルチAI発明創出機能**：Claude・GPT・Geminiが一つのチャット上で議論する機能。
- ・**IP Samurai MCPサーバー**：生成AIと特許DBをMCPで直結し、知財業務をAIエージェント化する基盤。 ⁵

重要なのは、「特許ウォーズ®」は現時点の公開資料では**“単独の完成済み製品名”**というより、**知財戦略支援全体を束ねる上位コンセプト／機能群の総称に近い**ことです。PR TIMESの発表でも、AI Samuraiは「特許ウォーズ®および特許MCPを通じて、発明創出、先行技術調査、競合分析、知財戦略立案までを支援する次世

代の知財プラットフォームを目指す」と説明しており、公開情報上は一つの画面・一つの機能より、複数機能を束ねる戦略レイヤーとして読めます。 6

特許ウォーズとマルチAI発明創出機能の実像

ユーザー文面では「発明御三家」と表現されていますが、私が確認した公式公開資料では、このマルチAI機能の正式名称は「三人寄れば文殊の知恵」です。2026年7月9日のAI Samurai公式発表では、Claude・GPT・Geminiの3つの大規模言語モデルが一つのチャット上で議論を交わす、知財業務向けマルチAI発明創出機能として説明されており、機能の核は「複数AIの合議」にあります。公開資料上、「発明御三家」という表記は確認できず、少なくとも現時点の公式名称ベースでは「三人寄れば文殊の知恵」と把握するのが正確です。 7

この機能で特に面白いのは、単にモデルを切り替えられるだけではなく、モデル同士を“討議させる”設計に進んでいる点です。AI Samuraiは2026年3月に、すでにIDEA BOX上でGPT、Claude、Geminiなど複数AIを用途に応じて切り替える機能を追加していました。続いて4月のセミナーでは、複数の生成AIを用いた相互分析・クロスチェックや、AI同士の客観的な議論を擬似的に発生させることで人間の思い込みや見落としを防ぐという考え方を前面に出しています。そして7月9日の発表で、その延長線上にある形で、3モデルが同一チャット内で順番に応答し、同意・反論・補足を行う「合議型」機能へ進化させたことが分かります。つまり、今回のマルチAI機能は突然出てきたのではなく、「切り替え」→「クロスチェック」→「合議」という流れで段階的に発展してきたものです。 8

公開されている機能仕様も、かなり実務寄りです。AI Samuraiはこの機能について、3つのAIがランダムな順で会話履歴全体を踏まえて応答すること、議論の周回数をユーザーが設定できること、各AIに「特許庁審査官」「出願人側弁理士」「技術専門家」などのペルソナを与えられることを明示しています。活用例としては、模擬審査シミュレーション、クレームの曖昧性チェック、発明発掘・実施例の拡張、知財人材教育が挙げられています。ここまで具体的に使い道が切られている点から見ると、これは一般的な“AI会議ごっこ”ではなく、特許実務で揉めやすい論点を多面的に洗い出すためのワークフロー支援機能として設計されていると読むのが妥当です。 9

このアプローチに技術的な筋はあるのか、という点については、一定の裏付けがあります。2023年のマルチエージェント討論研究では、複数の言語モデルが複数ラウンドで応答し合う枠組みが、数学的推論や戦略推論、生成内容の事実性改善に有効であることが示されています。一方で、2025年以降の研究では、討論は常に万能ではなく、強い推論能力を持つメンバー構成や多様性が重要で、議論を毎回走らせるとトークンコストが重く、場合によっては正しい単独解答を議論が壊してしまうこともあると指摘されています。つまり、ユーザーの期待どおり「単独LLMでは届かない水準」を狙える可能性は十分ある一方、品質を本当に上げるには、誰を参加させるか、何ラウンド回すか、どの場面で議論を起動するか的设计が勝負です。AI Samuraiが周回数設定やペルソナ設定を入れているのは、その課題に対する実務的な回答と見ることができます。 10

IP Samurai MCPサーバーの意味とPatentfieldとの比較

今回の新機能群のなかで、最も完成度の高い“運用基盤”として公開されているのが「IP Samurai MCPサーバー」です。AI Samuraiは2026年7月2日、このサービスを「Claude等の生成AIを自社専用の『知財のプロ』に育てる新プログラム」として発表しました。内容は、企業が日常的に使う生成AIと特許データベースを、MCPを用いて直接連携させるDB直結型AIソリューションで、日本・米国・中国の特許実データを直接参照しながら、特許調査、競合分析、SDI、発明発掘、発明提案書作成、請求項作成、明細書作成、OA対応、ポートフォリオ分析、知財戦略立案までの10業務をAIエージェント化の対象として掲げています。公開事例では、通常8時間かかるIPランドスケープ作業を約30分で完了したケースも紹介されています。 11

技術的な意味を整理すると、ここでいうMCPは、Anthropicが紹介し、公式仕様サイトが整備している **Model Context Protocol** のことです。AnthropicはMCPを、**AIツールと外部データソース・ツールの間に安全な双方向接続をつくるオープン標準**と説明しています。公式仕様サイトでも、**LLMアプリケーションと外部データソース・ツールをシームレスに統合するためのオープンプロトコル**と定義されています。AI Samuraiはこの共通規格を使って、「**AIチャットの外側にある特許DBへの埋め込み接続**」を、**知財専用で作ったわけ**です。だから本質的には、単なる新UIではなく、**汎用LLMに知財の手足を生やす仕組み**です。 12

この点が、知財実務にとってはとても大きいです。一般的な生成AI単体では、**特許実データに根ざさない要約や推論、いわゆるハルシネーション**が大きな弱点でした。AI Samurai自身もそこを従来課題として明示し、**実データ駆動で信頼性を担保**することをIP Samurai MCPサーバーの価値として打ち出しています。つまり、「AIが賢い」ことではなく、「**AIが正しいソースに直接触れている**」ことを価値化しているのが、このサービスの重要なポイントです。知財はとくに、クレーム、引用文献、出願人、年次推移、ファミリー、競合出願動向など、「**出典に触れていない回答**」が致命傷になりやすい領域なので、この設計は筋が良いです。 11

Patentfieldとの比較で見ると、ユーザーの指摘どおり、方向性にはかなり共通点があります。Patentfieldの公式情報では、同社は**AI特許総合検索・分析プラットフォーム**として、**生成AIで約8,000万件の特許を要約・構造化したAIサマリー**を持ち、API連携では**グループウェアやチャットツールへの特許検索機能組み込み、ChatGPTと連携した独自AIシステム構築、MCPを活用した知財AIエージェント**の紹介まで行っています。また、Patentfield AIRは**検索母集団全体への生成AI査読やポートフォリオ分析**を前面に出しています。したがって、「**生成AIと特許情報を標準接続して、知財実務の対話型・自動化を進める**」という大きな潮流は、**AI SamuraiだけでなくPatentfield側にも明確に出ている**と言えます。 13

ただし、両社の見せ方には違いがあります。Patentfieldは、**自社プラットフォーム内でAIサマリー・分析・API連携を広げる“統合分析基盤型”**の色が強いのにに対し、AI Samuraiは、**Claude等の既存AIチャットを入口にしながら、特許DB直結で実務をエージェント化する“外部LLM接続型”**の色が強いです。言い換えると、Patentfieldは「**特許情報プラットフォームをAI化する**」方向、AI Samuraiは「**AIチャットを知財実務端末に変える**」方向により寄っています。どちらが主流になるかはまだ決まっていませんが、MCPそのものがオープン標準として拡大し、Googleも2026年1月にGoogleサービスでの公式MCPサポートを発表していることを踏まえると、**知財領域でも“標準接続されたAIエージェント”が広がる可能性はかなり高い**と見てよいです。これは断定ではなく、公開動向からの合理的な推論です。 14

大阪大学との共同開発の現在地

大阪大学とAI Samuraiの関係は、今回だけの単発コラボではありません。AI Samuraiは2021年の公式説明で、**2018年から大阪大学・鬼塚真教授と「グラフマイニングを用いた特許文章の解析／判定」に関する共同研究を進めてきた**としています。その成果として、**ビッグデータにおけるグラフマイニング技術と言語解析処理技術を融合し、特許文章の解析と特許審査シミュレーションを可能にしたことが現在のAI Samurai提供につながった**と明記しています。さらに2019年には、**大阪大学吹田キャンパスにAI技術融合開発研究所を開設**し、特許の類似検索や高速多次元検索の新規手法・精度評価に注力してきました。今回の発表会で大阪大学セッションが大きく組まれているのは、こうした長い共同研究の延長線上にあります。 15

鬼塚教授の現在の研究テーマも示唆的です。発表会告知に載った講師紹介では、鬼塚教授は**グラフマイニング技術Graponをはじめ、大規模言語モデルと知識グラフを融合するGraphRAG、グラフ深層学習、クラウドデータ管理**に取り組んでいると紹介されています。ここから分かるのは、今回の大阪大学連携が単なる“大学のお墨付き”ではなく、**特許文書の構造理解、ネットワーク理解、知識グラフ化、GraphRAG的な推論基盤**につながる研究系統の上に乗っていることです。特許やポートフォリオを「網」として扱う発想とも非常に相性が良い研究背景です。 16

ユーザーが高く評価している「**特許網（パテントポートフォリオ）自動生成**」については、正直に言うと、**公開情報はまだまだかなり限られます**。発表会の公式告知では、第2部が「大阪大学×株式会社AI Samuraiの共同

開発の歩みと生成AIの最新情報について」とされているだけで、**ポートフォリオ自動生成機能のUI、入出力、対象データ、評価指標、出力形式、提供時期**といった具体仕様までは公開されていません。したがって、現時点で確認できるのは**“共同研究テーマとして強く示唆されている”**というレベルで、一般提供が近い完成品としての裏付けはまだない、というのが厳密な見立てです。 16

ただし、将来性はかなりあります。AI Samurai ONEはすでに、**検索・評価・作成**をワンストップで扱い、**IP Landscape表示、クレームチャート自動生成、日本・米国・中国特許検索、特許文書作成支援**を持っています。Patentfield側でも、生成AIによる**ポートフォリオ分析**が前面に出ています。こうした実務要素が既に揃っており、そこに大阪大学側の**グラフマイニングやGraphRAG系の研究**が重なるなら、“**個別特許の検索・評価**”から“**一群の特許網の自動把握・戦略提案**”へ進む流れは非常に自然です。ここはまだ公開仕様で断定できないため、あくまで研究・既存機能からの推論ですが、かなり筋の良い方向です。 17

なお、ユーザー文面にある「**これまでより体感スピード50倍**」という定量表現については、**私が確認した公式公開資料では裏付けを見つけられませんでした**。ここは、期待としては理解できるものの、現時点の公開情報ベースでは数値評価として引用しない方が正確です。 18

企業の知財業務をどこまで変えそうか

今回の一連の発表を業務フローで見ると、AI Samuraiが狙っているのは、**発明の種の発掘 → 先行技術調査 → クレーム整理 → 明細書作成 → AIレビュー → OA対応 → ポートフォリオ分析 → 戦略立案**までを、できるだけ同じ系統のAIワークフローでつなぐことです。AI Samurai ONEの製品ページでも、同社はすでに**検索・評価・作成**を一体で打ち出し、**審査シミュレーション、クレームチャート、IP Landscape、特許文書作成支援**を主要機能として運用しています。そこに2026年3月の**複数AI切り替え**、4月の**クロスチェック運用**、6月の**AIレビュー**、7月の**MCP連携とマルチAI合議**が重なってきたことで、**知財部門の各工程が一つのAI連動系に編成されつつある**と見ることができます。 19

この中で特に実務インパクトが大きいのは、**上流の“発明整理”と下流の“特許実務”が切れずにつながる点**です。2026年3月のIDEA BOX説明では、AI Samuraiは、**技術的な着想や構想が知財検討に適した形式まで整理されず、評価・調査プロセスに接続されないまま埋もれる問題**を挙げていました。その解決として、**発明アイデア入力から関連特許抽出、対比表作成、差異抽出、構成要件追加**までを対話型で進める流れを示しています。これはR&D現場から見れば、**発明メモがそのまま知財ワークフローに乗る**ことを意味します。実務的には、これはかなり大きいです。 20

さらに6月のAIレビュー機能により、AI Samuraiは**ドラフトの品質管理工程**までカバーを始めました。公開資料では、**総合レビュー、符号整合チェック、先行詞チェック、分野別レビュー、ユーザー追加レビュー項目**が示されており、従来は弁理士の技能やレビュー文化に依存していた確認作業を、少なくとも一次チェック段階では標準化しようとしています。知財部にとっては、**生成AIが下書きを作ることより、レビュー観点が標準化されることの方が実は効く**ケースも多く、この意味でAI Samuraiの方向性はかなり実務的です。 21

ただし、**過大評価は禁物**です。第一に、マルチAI討論は研究的には有望でも、**常に品質を底上げするわけではなく、トークンコストや誤った多数派形成の問題**があります。第二に、MCPで特許DBを直結しても、**最終的な権利化判断や侵害判断、戦略判断そのものをAIだけに委ねるのは危険**です。AI Samurai自身も、AIレビューの発表で「**生成AIは人の判断を置き換えるものではなく、伴走者**」と述べています。第三に、企業導入では**プロンプト管理、標準化、セキュアな基盤構築**が不可欠で、AI SamuraiもMCPサーバーの価値としてそこを強調しています。要するに、これは“**弁理士や知財担当者が不要になる**”技術ではなく、**熟練者の判断を支える前処理・整理・比較・下書きの層を大幅に強化する技術**と見るのが現実的です。 22

総合評価

今回のAI Samurai新機能発表会2026を、公開情報だけで冷静に評価すると、最も「すでに始まっている」ものはIP Samurai MCPサーバー、最も「競争優位の芽」があるものはマルチAI協議型の発明創出機能、最も「将来インパクトが大きい、まだ情報が少ない」ものは大阪大学とのポートフォリオ自動生成系です。つまり、三者三様に成熟度が違います。MCPは実装段階、マルチAIは提供予定レベルの有望機能、ポートフォリオ自動生成は研究色が強い将来テーマ、という並びです。

それでも全体像としては、AI Samuraiが「汎用AIを知財に使う」段階から、「知財固有のデータ・評価・審査・教育・戦略の流れをAI中心に再設計する」段階へ入ったことは確かです。会社の従来機能である審査シミュレーション、クレームチャート、IP Landscape、文書作成支援に、2026年の複数AI・AIレビュー・MCP接続が重なった結果、同社のポジションは明らかに変わりつつあります。ユーザーの言う「汎用AIで出来ないことを次々と提案するAI Samurai」という見方には、公開資料ベースでもかなり根拠があります。特に、“AIに考えさせる”だけでなく、“AIを特許実データにつなぎ、複数AIを討議させ、結果をクレームやレビューに落とす”ところまで踏み込んでいる企業は、国内でもまだ多くありません。

最終的に私の評価を一言でまとめるなら、**AI Samurai新機能発表会2026は、知財DXの延長ではなく、「知財AIエージェント時代」の実務OSを先に取りに行く宣言**でした。現時点ではまだ構想段階の部分もありますが、少なくとも公開情報から見える範囲では、**同社は発明創出・調査・文書・レビュー・ポートフォリオ・戦略を一本のAIシステムに束ねようとしている**。そこが、この発表会の本当のインパクトです。 25

- 1 4 5 6 16 18 25 AI Samurai新機能発表会2026「特許ウォーズ®」始動ー AIエージェント時代の知財戦略へーを開催します！！ | 株式会社AI Samuraiのプレスリリース
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000298.000021559.html>
 - 2 11 23 AIが特許DBを自由自在に操る時代へ。企業の生産性を圧倒的に高める「知財AIエージェント」提供開始 | 株式会社AI Samuraiのプレスリリース
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000300.000021559.html>
 - 3 お知らせ | 特許申請支援システムの「株式会社AI Samurai」
<https://aisamurai.co.jp/news/>
 - 7 9 AI Samurai、マルチAI発明創出機能「三人寄れば文殊の知恵」を提供予定 | 特許申請支援システムの「
<https://aisamurai.co.jp/2026/07/09/ai-samurai%E3%80%81%E3%83%9E%E3%83%AB%E3%83%81ai%E7%99%BA%E6%98%8E%E5%89%B5%E5%87%BA%E6%A9>
 - 8 20 【AI Samurai ONE 機能追加】複数の生成AIを切り替え可能！『IDEA BOX』で特許調査・分析を効率化 | 株式会社AI Samuraiのプレスリリース
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000287.000021559.html>
 - 10 [2305.14325] Improving Factuality and Reasoning in Language Models through Multiagent Debate
<https://arxiv.org/abs/2305.14325>
 - 12 14 Introducing the Model Context Protocol
https://www.anthropic.com/news/model-context-protocol?utm_source=chatgpt.com
 - 13 人とくるまのテクノロジー展 2026 NAGOYA 出展のお知らせ
https://patentfield.com/news/316?utm_source=chatgpt.com
 - 15 株式会社AI Samuraiは2021年4月から、大阪大学と北陸先端科学技術大学院大学による発明創出AI®企業として生まれ変わります。 | 特許申請支援システムの「株式会社AI Samurai」
<https://aisamurai.co.jp/2021/06/14/with-universities/>

17 19 24 AI Samurai ONE | 特許申請支援システムの「株式会社AI Samurai」

<https://aisamurai.co.jp/aisamuraione/>

21 AI Samurai ONEで生成AIにより特許文書レビューが大幅効率化！ | 株式会社AI Samuraiのプレスリリース

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000297.000021559.html>

22 [2511.11306] iMAD: Intelligent Multi-Agent Debate for Efficient and Accurate LLM Inference

<https://arxiv.org/abs/2511.11306>